

グローバル人材の育成をめざした留学生交流活動の開発(2)

—「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」に焦点をあてて—

君岡 智央 佐原 美穂 掛 志穂 金岡 美幸
米倉 智久 松宮 奈賀子 児玉 真樹子

1. 問題と目的

世界の経済，社会がグローバル化したことによりグローバル人材育成推進会議（2012）は，若い世代に育成すべき「グローバル人材」の概念について次のように整理した。「要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力，要素Ⅱ：主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感，要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ¹⁾」である。

本園は昨年度，「広島大学 学部・附属学校共同研究紀要」において「グローバル人材」の概念の中から「主体性・積極性」「チャレンジ精神」の育成に焦点をあてた留学生交流活動を開発し，実践を行った。その結果，言葉が通じない留学生に身振り手振りで積極的に関わろうとする子どもたちの姿や，留学生の様子を見ながら相手意識をもって日本の踊りを教える子どもたちの姿が見られるなどの成果が得られた。一方，「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」の育成については課題が残る現状がある。これまでも日本の伝統文化を留学生と共に楽しめるような活動として「お茶会」を行ってきたが，留学生とのかかわりは少なく，内容としては子どもたちだけでも十分に楽しめるものであった。したがって留学生交流活動としてのお茶会の内容を見直す必要があると考える。また，留学生の出身国の文化について話を聞く機会はこれまでも設けてきたが，留学生の口頭説明で他国の文化を子どもたちがイメージすることは非常に難しく，表面的な異文化交流活動にとどまりがちであった。このことから，異文化に触れる交流活動の実践方法にも更なる工夫が必要と考える。

そこで本研究では，「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」に焦点をあて，子どもたちが留学生の出身国の文化に触れる中で興味をもったり，日本文化に関して知り得たことなどを留学生に伝えたりしていくことにつながる新たな交流活動を開発，実践し，その成果を検証することを目的とする。また，本研究によりグローバル人材の育成に必要な「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」の育成につながる指導の在り方を検討していくこととする。

2. 「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」のとらえとめざす子ども像

異文化について大辞林第三版では，「価値観や言語，習慣や行動様式など，自分が親しんでいる文化とは規範・営みの異なる文化²⁾」と示している。また，鈴木（2005）は「異文化を理解するということは（中略）異質なものを認めるということである³⁾」と述べている。これらのことから，異文化に対する理解を「自分が親しんでいる日本の文化とは異なる文化を受け入れる」ととらえることができると考える。しかし，異なる文化を受け入れる以前に，自分が親しんでいる日本の文化以外にどのような文化があるのかを知ることや興味をもつこと，また日本の文化と比較をし，どのように違っているのかに気づくといった体験が必要になってくるのではないだろうか。その上で初めて，異文化に対する理解が生まれてくるのだと考える。こうした考えから，子どもたちと留学生の交流活動における異文化に対する理解を次のようにとらえた。

【異文化に対する理解】

留学生の出身国の文化に触れる中で、興味をもち始めている
日本の文化と留学生の出身国の文化の違いを感じている

一方で、「日本人としてのアイデンティティ」を熱海（2015）は「我が国の文化・伝統を継承し、それを発展させること⁴⁾」ととらえている。幼児期の子どもたちが将来、日本人としてのアイデンティティをもち、我が国の文化・伝統を継承、発展させるようになるには、まず、日本の文化に触れてみることからだろう。そして、実際に触れてみることで日本の文化・伝統に対する興味や“大事にしたい”などといった思いが湧き、日本の文化の良さや知り得たことなどを誰かに伝えたいと思うようになるのだと考える。そのような積み重ねがあって、子どもたちは日本の文化を継承し、発展させていこうとするのだと考える。

これらのことを考慮して、子どもたちと留学生の交流活動における「日本人としてのアイデンティティ」を次のようにとらえた。

【日本人としてのアイデンティティ】

興味をもった日本の文化に関して知っていることなどを留学生に伝えている

異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティのとらえから、留学生交流活動におけるめざす子ども像を次のように設定した。

【めざす子ども像】

日本や留学生の出身国の文化に興味をもったり、双方の違いを感じたりするとともに、日本の文化に関して知っていることなどを留学生に伝えていく子ども

尚、日本の文化や留学生の出身国の文化の内容については、価値観や言語、習慣や行動様式だけに限らず、幼児期の子どもたちが興味をもちやすいよう、食、生活（遊びを含む）、建造物、芸術なども含め、広義にとらえることとする。

3. 留学生交流活動の計画と内容

めざす子ども像に向かっていくような留学生交流活動を開発していくため、計画と内容を

次のように設定した。

【第1回交流（9月）】

【異文化に対する理解】

幼稚園で日頃、遊んでいる手遊びを留学生と一緒にやってみる中で、他国の文化に興味をもてるようにする

【第2回交流（10月）】

【異文化に対する理解】

留学生の出身国の遊びを通して、他国の遊びや言葉に興味をもてるようにする

【第3回交流（11月）】

【異文化に対する理解】

留学生が出身国の文化遺産などを映像で見せることで、園児が他国の文化に興味をもてるようにする

【第4回交流（12月）】

【異文化に対する理解・日本人としてのアイデンティティ】

日本の伝統文化である「お茶会」を開き、子どもたちが点てた抹茶を留学生に振る舞い、一緒に味わう。また、留学生の出身国のお茶を飲み、日本の抹茶と他国のお茶の違いを感じられるようにする

【第5回交流（1月）：年少・年中組のみ】

【日本人としてのアイデンティティ】

子どもたちが留学生と正月遊びをすることで、日本の伝統的な遊びの楽しさを味わえるようにする

【第6回交流（2月）：年長組のみ】

【日本人としてのアイデンティティ】

劇遊びを通して、子どもたちが日本の昔話の良さを留学生に伝えていけるようにする

留学生の出身国は、中華人民共和国（以下、中国）、ベトナム社会主義共和国（以下、ベトナム）、インドネシア共和国（以下、インドネシア）である。

4. 研究の方法

(1) 対象児

研究の対象は、本研究の代表が受け持つ年長組5歳児（男児18名 女児15名）とする。

(2) 期間・場面

期間は、平成28年9月から平成29年2月までとする。場面は、第1回から第4回及び第6回留学生交流活動を行っている最中と活動後の好

きな遊びをしている時やまとまった活動に焦点をあてる。

(3) 検証の方法

全5回の留学生交流活動の中で子どもたちの様子を記録し、実践事例として書き起こす。その実践事例を基に「異文化に対する理解」と「日本人としてのアイデンティティ」の両面で、それぞれの活動でどのような成果が見られたのか、という視点で考察を行い、開発した留学生交流活動の成果と課題を導き出す。

5. 実践事例

実践例 1

第1回交流（9月）：異文化に対する理解

【背景】

子どもたちと留学生の親睦を兼ねて、学級でよくしている手遊びの一つ「グー・チョキ・パーで何作ろう」を行った。この手遊びには、学級独自の遊び方があり、歌の最後に自分が知っている麺料理を答えることになっている。リズムに合わせながら一人ずつ順番に麺料理を答えていると、中国出身の留学生 a さん（女性）に順番が回ってきた。留学生には、あらかじめ出身国の麺料理を答えてもらうようお願いしておいた。

「美味しそう・・・」

留学生の a さんに順番が回ってくると a さんは、中国の麺料理である「ジャージャー麺」とリズムに合わせて歌う。子どもたちは、「ジャージャー麺？」「え～。何なんかねえ」などと言いながら初めて聞く麺料理の名前に驚いている。教師が「a さん、ジャージャー麺ってどんな料理ですか？」と尋ねる。子どもたちが興味深く耳を傾けている。すると、A 児が「ジャージャー麺、知ってるよ。ピーマンが乗ってるんだよ」と答える。a さんが「う～ん。ピーマンが乗っているものもあります。肉みそとキュウリの千切りやピーマンが乗っています」と答える。教師が、「ジャージャー麺ってこれですか？」と a さんに問いかけながらジャージャー麺の写真を子どもたちに見せる。a さんが「そうです。これです！」と答える。子どもたちが「美味しそう・・・」とつぶやいたり、肉みその色を見て「食べたなら辛いのかなあ・・・」と友だちと話したりしている。その後、ジャージャー麺の写真は、子どもたちの見えやすいところに掲示し

ておく。

交流活動の翌日、子どもたちがカフェレストランゴっこをするためのご馳走づくりをしている。この時、B 児と C 児が「今度は何のご馳走を作る？」と話し合っている。B 児がジャージャー麺の写真を見て、「そうじゃ、ジャージャー麺、作ろうや。美味しそうだし」と C 児に伝えている。C 児も「いいね。作ろう作ろう」と声をかけている。二人は材料置き場に行き、容器や黄色い毛糸などを取り出す。黄色い毛糸を麺にし、容器に入れると緑の折り紙を細切りにして毛糸の上に乗せる。また、肉みそ部分にはちぎった茶紙を乗せている。

B 児と C 児が、「先生、これ、ジャージャー麺！」と言いながら、作ったジャージャー麺（図1）を嬉しそうに教師に見せに来る。「うわっ、美味しそう！！これは、キュウリの細切り？」と尋ねると「そう！美味しそうでしょ！」と C 児が返す。B 児と C 児はその後、ジャージャー麺を友だちに見せたり、追加で飲み物も作ってジャージャー麺セットにしたりしている。



図1 ジャージャー麺

【考察】

初めて耳にするジャージャー麺という料理名に驚く子どもたちの姿から子どもたちが留学生の出身国の麺料理に興味をもち始めており、「異文化に対する理解」の第一歩が見られたと言えよう。これは子どもたちが日頃から親しんでいる手遊びを楽しむ中で、留学生の出身国の麺料理に触れられるようにしたことがきっかけとなっている。幼稚園での教育は「遊び」を中心としている。その「遊び」を通して他国の食文化に触れられるようにすることは、子どもたちにとって受け入れやすく、自然な形で興味をもつことにつながっていくと考える。そのため、留学生に“子どもたちが日頃から親しんでいる

手遊びを通して他国の食文化に触れさせたい”という意図を伝えておくことが必要になると考える。そうした事前の打ち合わせも、他国の文化に興味をもてるようにする交流活動を行ううえで、重要なポイントになると考える。

また、ジャージャー麵の写真を子どもたちの目に触れることができるよう、掲示しておいたことでB児とC児がカフェレストランごっこのご馳走にジャージャー麵を取り入れ、いろいろな素材を用いて作り始めた。子どもたちがジャージャー麵を受け入れていることがわかる。掲示していなければ前日にジャージャー麵の写真を見ただけで忘れ去ってしまう可能性も十分にあったと考える。しかし、掲示しておいたことでB児とC児に“美味しそう”と思ったジャージャー麵を思い出し、“作ってみたい”という思いを抱かせるきっかけになっていると考える。興味をもった留学生の出身国の文化に、交流活動後も継続して触れることのできる環境を整えていくことは、子どもたちが楽しみながら異文化を受け入れるようになるための必要な手立てとなってくると考える。

実践例 2

第 2 回交流 (10月): 異文化に対する理解

【背景】

留学生の出身国の遊びや他国の言葉に触れることができるよう、学級全体の場で教師が留学生に「留学生さんの国にジャンケンがありますか?」と尋ねてみた。留学生が「はい。あります」と答えると、子どもたちが留学生の出身国のジャンケンの話に耳を傾け始めた。

「サトゥ・ドゥア・ティガ!!!」

インドネシア出身の留学生 b さん (男性) が、子どもたちがしている日本のジャンケンを見て「インドネシアのジャンケンはちょっと違います」と話す。子どもたちが興味深く b さんを見ている。b さんが親指を立てたり、小指を立てたりしながら説明を始める。b さんが親指を立てているのを見て、D 児が日本のジャンケンを例に出し「それってゲー? チョキ?」と尋ねる。b さんが親指を立てた手を触りながら「う〜ん。これはゾウです」と答える。子どもたちが「え〜、ゾウ?」「ゾウ、大きいけえじゃ!」などといった驚きの声を上げる。b さんが小指を立て

た手を子どもたちに見せ「これはアリです」と話す。また子どもたちが「え〜、アリ〜?」と驚きの声を上げる。b さんが、最後に人差し指を立てた手を子どもたちに見せると、「う〜ん・・・」と唸りながら何の動物だったかを思い出そうとしている。しばらくすると E 児と F 児が、「へビ?」「へビじゃない?」と尋ねている。b さんが「そうですね」と答える。

G 児が「どうやってやるん?」と尋ねるので b さんがインドネシアのジャンケンの勝ち負けについて説明を始める。親指を立てた手 (ゾウ) と小指を立てた手 (アリ) を見せると、H 児が「ゾウ (親指を立てた手) の勝ち! 大きいから」と声を上げる。b さんは「アリとゾウでは、アリの勝ちです」と話す。ゾウの勝ちだと思っていた子どもたちが「え〜。何で?」と疑問の声を上げる。b さんが「アリはゾウの目の中に入ります。痛いです」と答える。子どもたちは納得したのか「おおっ」と小さく声を上げている。教師が「ジャンケンの掛け声はどのようにするんですか?」と尋ねる。b さんが「1・2・3 です。インドネシア語で、サトゥ・ドゥア・ティガと言います」と答える。すると子どもたちが「サトゥ・ドゥア・ティガ」と掛け声を言い始める。そして、b さんと子どもたちでインドネシアのジャンケンが始まる。「サトゥ・ドゥア・ティガ!!!」子どもたちの声が保育室に響く。勝った負けたで子どもたちは一喜一憂している。その後も子どもたちは友だちや教師に「インドネシアのジャンケン、一緒にしよう!」と声をかけ、一緒に遊んでいる。

翌日、教師が子どもたちにインドネシアのジャンケンをしてみての感想を聞く。I 児が、「新しいジャンケンができてよかった」と答える。

【考察】

インドネシアのジャンケンのやり方を知ることができるようにしたことで、子どもたちがインドネシアのジャンケンに興味をもち、友だちや教師に「一緒にしよう!」と声をかけ誘っている。子どもたちが異文化に触れることを楽しんでおり、こうした姿が「異文化に対する理解」につながっていくと考える。ジャンケンは、日本の子どもたちにとっては馴染みのある遊びである。そのため、子どもたちは、“他国ではどのようにしているのか知りたい”と思うのだろう。

また、掛け声やジャンケンの手の出し方など、同じ遊びでも日本と全く違うことが子どもたちにとっては新鮮であり、“やってみたい”という気持ちをもつことにつながったと考える。

また、子どもたちがジャンケンの掛け声を通して、インドネシアの言葉に触れ、「サトゥ・ドゥア・ティガ」と繰り返し声に出している。日本でも馴染みのあるジャンケンの掛け声を取り上げて、他国の言葉に触れられるようにしたことが子どもたちにとっては受け入れやすかったと考える。そして、一度で他国のいろいろな言葉に触れられるようにするよりも、ジャンケンの掛け声のように短い言葉一つを楽しみながら触れられるようにしたことも子どもたちにとっては他国の言葉に触れる楽しさを実感することにつながっていると考える。

このように、自分たちにとって馴染みのある日本の文化とつながりをもたせながら留学生の出身国の文化に触れられるようにすると、子どもたちが他国の文化に興味をもちやすくなると考える。

実践例 3

第 3 回交流 (11月): 異文化に対する理解

【背景】

留学生の出身国である中国とインドネシアの文化に関する映像を見せてもらうことになった。興味深く映像を見ながら子どもたちが疑問に思ったことなどを話し始めた。

「えっ？お城なん？」

映像に中国の文化遺産である万里の長城が映し出される。J児が「あれなんなん？」と興味深く聞いている。中国出身の留学生 a さんが「これはお城です」と言い、万里の長城について説明をし始める。子どもたちから「えっ？お城なん？」「えっ？すごい長い！」などと言い驚いている。D児が「これ階段になってるん？」と尋ねる。a さんが「そうです。登るのは結構、時間がかかります」と答える。「何分かかかるん？」「夜までかかる？」などといろいろと尋ねはじめる。a さんが「3時間くらいです」と答える。K児が「子どもでも行けるかねえ・・・」とつぶやくと、a さんが「行けます」と返している。教師が「3時間かかるということは、朝、幼稚園に来て、弁当を食べる時間までの間くらいか

な・・・」と答える。子どもたちは「え～、長い！」「時間かかるじゃん」などと声を上げている。K児が「この中に人が住んでるん？」と尋ねる。a さんが「いや。ここに人は住んでいません」と答える。更にL児が万里の長城の映像に映る雲か霧のようなものを指さし、「あれって雲が降りてきてるん？」と尋ねる。a さんが「う～ん。霧かもしれません、(万里の長城は)高いところにあるので、空が近くに見えます」と答える。子どもたちから「へえ～」という声上がる。

翌日、教師が子どもたちに、留学生の出身国の文化の映像を見ての感想を聞く。M児が「万里の長城がすごいなって思った。中国に行ってみたって思った」と答える。

【考察】

他国の文化に関する映像を見ることで、子どもたちが万里の長城が城であることに驚いたり、いろいろな質問をしたりしている。日本の城よりも形が違っていることから、子どもたちにとっては城らしく見えないということが驚きや質問をすることにつながっていると考える。子どもたちの中で異文化への興味が広がりつつあることから、「異文化に対する理解」も育まれつつあると言えよう。万里の長城が日本の城とは違い、特殊な形をしているだけに、教師や留学生が言葉で形を伝えても子どもたちがイメージしにくい可能性がある。万里の長城に限らず、文化の内容によっては同じことが考えられるだろう。しかし、映像で他国の文化に関するものを見せることで、子どもたちにとってはイメージがしやすくなり、見て“おや？”と思ったことを留学生にいろいろと尋ねたくなるのだと考える。

他国の衣服やマナーなどは子どもたちの目に直接触れられるようにすることができる。しかし、文化遺産など、その場所に直接行かなくては見るできないものに関しては、言葉で形や場所を伝えるよりも映像で見せる方が、子どもたちに伝わりやすく、イメージもしやすくなると考える。

実践例 4

第 4 回交流（12月）：日本人としてのアイデンティティ

【背景】

留学生が“日本の伝統文化であるお茶会のことについて勉強したい”と思っていることを子どもたちに話した。子どもたちはこれまで茶道の先生の指導の下、自分たちで抹茶を点てたり、和菓子を運んだりし、作法を大事にしながら抹茶をいただく体験をしていることもあり、お茶会への興味を深めている。そのこともあり、留学生にお茶会のことについて知っていることを“教えたい”と思い始めた。そこで、お茶会を設けて留学生と一緒に抹茶をいただくことになった。

「そうそう」

中国の留学生 c（女性）さんが抹茶を飲み終え、懐紙を持って周りを見渡している。その後、cさんは自分が飲んだ茶碗を拭くのかどうかを N 児に尋ねている。N 児は「そうそう」と言う。cさんが懐紙で茶碗について抹茶を拭き取ろうとすると、N 児が「違う違う」と手を振る。N 児が「こうやって・・・」と言いながら茶碗の自分の口を当てた部分に指を置き、こすように拭き取って見せる（図 2）。cさんが「こうやってやるの？」と N 児と同じようにやってみる。N 児は「そうそう」と言いながら、cさんが指で茶碗を拭く様子をじっと見ている。その後、N 児は自分のポケットの中から懐紙を取り出し、cさんに茶碗を拭いた指を拭き取る場所を見せる。cさんも同じようにやってみる。N 児はcさんが指について抹茶を拭き取るまで見届けると、茶碗を下げに来た友だちに深々とお辞儀をする。



図 2 留学生に茶碗の拭き取り方を見せる様子

【考察】

留学生と一緒に抹茶をいただく機会を設けるとともに、教師がお茶席のことについて知っていることを留学生に“教えたい”と思えるようにかかわったことで、N 児が留学生 c さんに茶碗の拭き取り方をさり気なくやって見せたり、作法に従って出来ているかどうかを最後まで見届けたりする姿が見られた。このことから、N 児に「日本人としてのアイデンティティ」が育まれつつあると考える。N 児にここまでのことができるのは、作法を知り、覚えておくことはもちろんだが、それよりも、これまでのお茶席で N 児が抹茶をいただくことの楽しさを実感していたり、お茶席での作法に興味をもっていたりしなければできないことだと考える。これがなければ、“日本の文化を伝えたい”という気もちにはならないだろうし、お茶席を設けても場を共にするだけで終わってしまうだろう。

このように日本の文化に触れ、“楽しい”と思える体験をしておくことが、日本の文化について“知っていることを留学生に伝えたい”という気もちをもち、伝えていくことにつながると考える。

実践例 5

第 4 回交流（12月）：異文化に対する理解

【背景】

お茶席の後、留学生が用意した出身国のお茶、3種を園児たちみんなでいただくことにした。中国、ベトナムのお茶をいただいた後、もう一つ別の種類のベトナムのお茶が園児一人ひとりのコップに注がれた。

「日本のより苦～い！」

園児たちがコップに鼻を近づけたり、中国の留学生に教えてもらったように手で扇いだりしながらお茶の香りを楽しみ始めている。O 児が「これ、匂いが大豆みたい！」と話すと、P 児が「本当じゃ大豆みたい」と言う。それを聞いた Q 児は「芋の匂いがする」と 3 人が感想を言い合っている。教師が「弁当を食べる時に飲んでいつものお茶（麦茶）と比べたらどう？」と園児に尋ねる。R 児は口を手で押さえながら「うわっ、日本のより苦～い！」と飲んでみての感想を話す。また、S 児は「このお茶、お豆の味がする！」などと言っている。T 児は顔をしかめながら自分の隣に座っている留学生 d さ

ん（女性）に「このお茶，タケノコの匂いがする」と伝えている。更にT児が、「1番目に飲んだ（中国の）お茶が2番目に苦くて，2番目に飲んだ（ベトナムの）お茶が1番，苦くなくて美味しくくて，今，飲んでる（ベトナムの）お茶が一番苦いよ！」と伝えている。一緒にお茶を味わっているdさんが笑顔で「そうですね」と返す。

園児がお茶を全て飲み終えた後，教師がお茶会で自分たちが点てた抹茶と中国，ベトナムのお茶の味や香りの違いについて尋ねてみる。その中でR児が，「お茶席で飲んだ抹茶の色はすごく緑だったけど，ここで飲んだ外国のお茶は色が薄かった」と感想を話す。

【考察】

子どもたちが留学生の出身国のお茶の香り，味，色を楽しむとともに，日本の抹茶や日頃から飲んでいるお茶（麦茶）と比較をし，違いを感じている姿が見られた。このことは，子どもたちが「異文化に対する理解」を深めていくための土台となると考える。用意したお茶の味や香りは様々で，それを実際に飲んだり嗅いだりしているため，子どもたちにとっては比較がしやすく，思ったことが伝えやすい。子どもたちの感想や味わっている様子から，留学生の出身国のお茶が自分の好みと合わず，“美味しくないととれるものもあった。しかし，異文化を理解するには，こうした体験が必要になると考える。必ずしも良い味，良い香りがするものばかりではなく，また，好みが自分たちと合わないものも当然あるのだということを知る体験をしていかななくてはならないと考える。そのように考えると，いろいろな国のお茶を比較する体験は意義のある活動ではあると考える。子どもたちの好みに合わせようとするのではなく，合わないだろうと思えるお茶も用意し，飲むようにすることも必要な体験となると考える。

実践例 6

第 6 回交流（2 月）：日本人としてのアイデンティティ

【背景】

留学生が“日本の昔話のことについて知りたい”“話はどのような内容なのか知りたい”などと思っていることを子どもたちに話した。子ど

もたちは以前，日本の昔話である「かさじぞう」と「つるによぼう」の劇遊びをしたことがあるため，二つの話の劇遊びを留学生に見てもらいたいと思い始めた。二つの昔話の劇遊びを見せた後，留学生に感想を述べてもらった。

「嬉しかった」

子どもたちが留学生の顔を真剣な表情で見つめる中，留学生 e さん（女性）が昔話「つるによぼう」の劇遊びを見て，「人だけではなく，動物を含む全てのものに対してやさしい気持ちをもつことは大事だなということが子どもたちの劇遊びからわかりました」と話す。続けて，通訳を介し，留学生 b さんが，「つるによぼうの話の中で大切なことがあるなと思いました。他の人たちにやさしくすること，約束を守らないといけないということ，この二つのことを守っていったら生きていくことがきっと幸せになるなと思いました」と話す。

その後，教師が子どもたちに，留学生の感想を聞いて思ったこと尋ねる。しばらく沈黙が続いた後，D 児が手を挙げ「（留学生さんが）よく見て，話してくれて嬉しかった」と話す。続けて U 児が，「留学生さんが嬉しかったことや楽しかったことを話してくれて嬉しかった」と話す。最後に，V 児が「劇をよく見てくれて嬉しかった」と話す。

【考察】

第 6 回交流では，劇遊びを通して子どもたちが日本の昔話の良さを留学生に伝えていけるようにすることを目的とする活動であった。しかし，実践の中で子どもたちが，日本の昔話の良さを伝えたいという思いをもって劇遊びをしていたかについては疑問が残り，「日本人としてのアイデンティティ」を發揮できたとは言えない。日本の昔話には，人が生きていくうえで大切にすべきことを伝えるという良さがあると考えますが，幼児期の子どもたちがこの点を理解したうえで劇遊びをしていないととらえている。それは，劇遊びが子どもたちの“この昔話，楽しいから劇遊びでしてみたい”“この昔話の〇〇の役になってみたい”などという思いから始まるものであり，昔話の良さとは関係なく，役になりきり演じる自分を身の回りの人たちに“見てもらいたい”という思いを強くもっているからだと考える。そのため留学生が，人が生きるうえ

で大切にすべきことに関する感想を述べても、子どもたちは、自分たちの劇遊びを見てくれたことの嬉しさを言葉で表したのだと思われる。このように考えると、今回の実践が幼児期の子どもたちにふさわしい取り組みではなかったことが窺える。そのため、昔話の良さを伝えていくというよりも例えば、日本の昔話を留学生と共に親しんだり楽しさを分かち合えたりするような内容に見直していく必要があると考える。

6. 成果と課題

本研究で新たに教材開発した留学生交流活動の成果と課題を指導方法と子どもの姿に視点をあて、各回の交流活動から述べる。

(1) 成果

【第1回交流：異文化に対する理解】

この回では、子どもたちが日頃から学級で親しんでいる手遊びを留学生と一緒にする中で、留学生の出身国の麺料理に触れられるようにした。また、留学生に教えてもらった出身国の麺料理の写真を子どもたちが見えやすいところに掲示しておいた。これにより、子どもたちが留学生の出身国の麺料理であるジャージャー麺に興味をもち、「美味しそう・・・」とつぶやいたり「食べたら辛いのかなあ・・・」と友だちと話したりする姿が見られた。更に、子どもたちのカフェレストランごっこのメニューにジャージャー麺を取り入れ、いろいろな素材を用いて作り始める姿が見られた。

【第2回交流：異文化に対する理解】

この回では、日本の子どもたちにとって馴染みのある遊び「ジャンケン」を取り上げ、留学生の出身国の掛け声ややり方で遊べるようにした。子どもたちがジャンケンのやり方などについて留学生に質問をしたり、掛け声を繰り返しながら他国の言葉に触れることを楽しんだりする姿が見られた。また、子ども自ら教師や友だちを誘って留学生の出身国のジャンケンを楽しむ姿が見られた。

【第3回交流：異文化に対する理解】

この回では、留学生の出身国の文化に関する映像を留学生の説明も加えながら見られるようにした。言葉のみの説明よりも映像があることで子どもたちには伝わりやすく、イメージもしやすい。これにより、万里の長城を見た子どもたちが留学生にたくさんの質問をする姿が見られた。また、万里の長城を見て「中国に行つて

みたい」と自分の気持ちをは話していた。

【第4回交流：異文化に対する理解・日本人としてのアイデンティティ】

この回では、子どもたちがお茶会に興味をもち始めたタイミングで、お茶会に関して知っていることを留学生に“教えた”と子どもたちが思えるようにかかわった。これにより、抹茶を飲み終わった後の茶碗のふき取り方をさり気なく留学生にやってみせたり、作法に従って出来ているかどうかを最後まで見届けたりする姿が見られた。

また、子どもたちの好みを問わず、様々な味、香り、色のお茶を味わうことができるようにするとともに、日本のお茶と比較できるような言葉のかけたことで、子どもたちがお茶の感想を話したり、それぞれの味、色などの違いを感じたりしている様子が見られた。

幼稚園において、「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」に焦点をあてた留学生交流活動を開発していく中で大切にすべき点が明らかになった。一つは、異文化を理解する以前に、子どもたちが異文化に触れる楽しさを味わい、興味を深めていくことや文化の違いを感じながらも必ずしも自分の好みと合うものばかりではないことを知るような体験が必要であるということ。二つ目は、幼児期の子どもたちに「異文化に対する理解や日本人としてのアイデンティティ」を育成していくためには、「幼児期の子どもの特長」、「学級の子どもの実態」を踏まえ、園での日々の遊びを通して異文化を理解できるようにかかわったり、日本人としてのアイデンティティを発揮できるような場を設けたりすることが必要であるということ。これらの点を考慮して、「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」に焦点をあてた留学生交流活動を行っていく必要がある。こうした大切にすべき点が明らかになったことを成果ととらえ、教師が意識して留学生交流活動を行っていききたい。

(2) 課題

【第6回交流：日本人としてのアイデンティティ】

この回では、劇遊びを見た留学生の感想に対し、子どもたちが「(留学生さんが)よく見て、話してくれて嬉しかった」、「劇をよく見てくれて嬉しかった」などと思ったことを話していた。

この回は、劇遊びを通して子どもたちが日本の昔話の良さを留学生に伝えていけるようにすることを目的にしていた。しかし、本園の劇遊びは、子どもたちが遊びながらストーリーをつくり上げ、役になることを楽しんでいくことを大切にしているため、子どもたちが日本の昔話には人が生きていくうえで大切にすべきことを伝える良さがあることを理解していなかった。そのため、子どもたちが留学生に昔話の良さを具体的に伝えていくことは困難であり、日本人としてのアイデンティティを育成したい教師の思いと劇遊びを楽しむ子どもの思いに隔たりが生じてしまった。今後、このような活動については、日本の昔話に留学生と共に親しんだり楽しさを分かち合えたりするなど内容を見直す必要がある。

7. 実践を終えて

世界のグローバル化が進展していく中、子どもたちが将来、国際社会という大きな舞台に立った時、文化の異なる人たちとそれぞれの良さを活かしながら協力して新しいものを生み出していくことを求められるだろう。そうした場合、グローバル人材の概念の中でも「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」の育成は、国際社会の中で生きていくための芽生えとして幼児期から積み重ねていく必要があると考える。今後は、本研究で明らかになった成果を活かした留学生交流活動を行っていくとともに、課題についても改善していけるようにする。また、グローバル人材の概念にあるその他の要素の項目で、どのような交流活動を行うことができるのかを引き続き探っていきたいと考えている。

引用文献

- 1) グローバル人材育成推進会議 (2012) 「グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)」, p. 8.
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf>.
- 2) 松村明 (2006) 「大辞林第三版」, 三省堂, p. 173.
- 3) 鈴木雅光 (2005) 「dialogos」 「異文化の理解」 東洋大学文学部英語コミュニケーション学科, p. 81.
- 4) 熱海則夫 (2015) 「日本人としてのアイデンティティの育成 共生と感謝の教育」, 悠光堂,

要 約

グローバル人材の育成をめざした留学生交流活動の開発（2）

—「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」に焦点をあてて—

本研究の目的は、幼稚園においてグローバル人材の育成に必要な「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」に焦点をあてた留学生交流活動を開発することである。検証の方法は、交流活動の実践事例を基に考察を行い、開発した活動の成果と課題を導き出す。開発した交流活動における成果となる子どもの姿は次の通りである。①留学生の出身国の麺料理に興味をもち、自分たちのカフェレストランごっこのメニューに取り入れて、いろいろな素材を用いて作る姿が見られた。②留学生の出身国のジャンケンのやり方などについて質問をしたり、掛け声を繰り返しながら他国の言葉に触れることを楽しんだりする姿などが見られた。③万里の長城を映像で見た子どもたちが、留学生にたくさんの質問をする姿が見られた。また、万里の長城を見て「中国に行ってみよう」と自分の気持ちを話していた。④留学生とのお茶会の中で、抹茶を飲み終わった後の茶碗のふき取り方をさり気なく留学生にやって見せたり、作法に従って出来ているかどうかを最後まで見届けたりする姿が見られた。⑤留学生の出身国の様々なお茶を飲み、日本のお茶と比較をしながら味、色などの違いを感じている様子が見られた。

Development of exchange activity with the student studying abroad to bring global human resources up (2)

—Focusing on intercultural understandings and identity as Japanese—

This study aims to develop a kindergarten cross-cultural exchange program to raise children's intercultural understandings and identity as Japanese. To achieve the goal, international students (IE) of Hiroshima University were invited to the kindergarten six times in total, and they shared traditional plays, ceremonies, and old tales together. The exchanges were recorded and children's utterances were analyzed. The following five achievements were found: (1) children showed interest in food habit of IE and tried to take that into their role play menu. (2) children asked questions about the traditional plays that IE introduced. (3) children asked many questions about famous places of IE's countries and said that they want to visit those places. (4) children tried to tell IE how to do Japanese tea ceremony by using gestures. (5) children compared different kinds of tea and found that each tea, each country, each culture has different and the same things.